博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	原　信太郎　アレシャンドレ
論 文 題 目	「改過」から「慎習」へ―明末清初期における修養論の展開

審査要旨

明代中期に現れた王守仁（王陽明）の思想である陽明学は、それまで権威を持っていた朱子学とは異なる修養論を提示した。この陽明学の修養論は心学系修養論とでも言うべきものであるが、その流布とともに、そこから出発しながら陽明学とは異なる独自の理論を持ち、さりとて朱子学に回帰するわけではない修養論も生まれた。本論文は、かかる陽明学の影響のもとに登場した新たな修養論に光りをあて分析を試みたものである。取り上げた思想家は明末の劉宗周とその弟子の陳確、また附論として江戸時代末期の山田方谷である。方谷は一般に陽明学者とされているが、実は彼の修養論は陽明学から独自に展開した面を持つのであって、かくて本論文は陽明学から派生した新たな修養論の中国における展開と日中の比較研究という両面を持っている。

本論文ではまず劉宗周の思想に大きな影響をあたえたとされる王守仁の弟子の王畿（王龍溪）と、劉宗周とともに証人社の同人であった陶奭齢の人間の「過（あやまち）」についての議論を取り上げ、彼らが人が生得している「良知」に満腔の信頼を置くがゆえに「過」を一過性のものと捉えるのに比して、劉宗周がいかに「過」を対応が困難な問題として認識していたかを明らかにする。なお著者は、劉宗周の問題意識が呂坤以来、お互いに日常の「過」を反省し合うという修養方法の実践が当時の社会的風潮となっていた状況を受けていることも指摘する。劉宗周は「過」を無意識なるもの、「悪」を意識化されたものとし、この「過」を自覚化することを求める。自覚化された「過」は衰退していくが、刻々と無意識の「過」は生ずるのであって、それゆえ無限に続く「過」の自覚化の営為を継続しなければならない。そして劉宗周はかかる「過」のおおもとにあるものとして「妄」を持ち出す。著者はこの「妄」という概念について劉宗周が内容解説をすることなく議論の前提として語ることから、内省と改過の要請を保証するための概念装置であるとする。また劉宗周はその一方で「慎独」を重視したことにも着目する。劉宗周は修養を後天的な「習」に限ることを否定し、先天的な「性」への復帰も説いたのであって、かかる「復性」が善悪判断の「独体」を確立することになり、それは自動的に「為善去悪」を進める働きを促し、ここに「改過」との思想的連結があると著者はする。

劉宗周の弟子の陳確は、『大学』を否定し、「習」を重視した個性的な思想家であるが、彼は劉宗周のいわば形而下的な「改過」説を継承する一方で、形而上的な「慎独」説の方は継承しなかったと著者は見る。つまり劉宗周は意識に沿った具体的実践の場を中心に置く修養論を唱えながら、その基底にある「独体」を視野に入れていたが、陳確の方は形而上的領域への関わりを排除する思考を持つというのである。そして劉宗周が排除した「習」こそが善悪を実現すると陳確がみなし、そこに焦点をあてた独自の修養論を打ち立てていることに注目する。著者は陳確が劉宗周とはかかる差異をみせながら、劉宗周から継承した重要な要素として、「過」が個々の状況で個別に生起し消滅するのではなく、連続的累積的に持続していくとした点をあげ、ここに王畿らの修養論の系譜とは異なった路線が見られるとする。更に著者は陳確の修養論が顔元などの思想を呼び起こす要素を持っていることも注意する。なお著者は陳確の個性的思想を言うために『論語』学而第一・第二章の「孝弟（悌）也者為仁之本与」の箇所の注釈を検討し、劉宗周が朱子学的読み方を継承（思想の意味付けは異なるが）しているのに対して、陳確が古注以来の読み（これも思想的には独自の味付けをしている）を採用している点から両者の差異を見る。

氏名 原　信太郎　アレシャンドレ

附論では幕末の山田方谷を取り上げる。方谷は一般には陽明学者と言われるが、独自の「養気」の思想を持っていたことも指摘されている。まず著者は、方谷は陽明学に対して全面的傾倒を示してはいず、陽明学の特徴である「致良知」に対してすら必ずしも無批判に受容しているわけではないことを注意する。そのほか方谷が普段は朱子学の注によって講じていたことなどもあげつつ、方谷が王守仁自身を評価していたのは確かであるが、王門については高い評価を持っていなかったことを指摘する。そのうえで方谷は朱子学の理気論に対抗しつつ陽明学の良知説が孕む問題も意識して、良知を気の知覚運動として再把握したことを論ずる。著者は方谷に王畿の影響を見たり、その思想の中核に陽明流の良知を置いたりする先行研究を批判し、方谷の「気学」は、陽明学の良知の独自の読み替えによるものとし、その気の思想が良知以外の重要概念の解釈にも及んでいることを具体的に示していく。方谷は晩年に向かって「養気の学」を確立していくが、著者は方谷が気の主張の背後に置いた「太虚」の概念こそが、方谷の公共性、倫理性を保証する基盤であったとする。最後に著者は方谷と三島中洲との継承と断絶について論ずる。三島は方谷から気の思想をも継承したが、太虚を継承しなかったとする。三島の義利合一論をそのまま方谷に重ねる従来の見方を批判しつつ、方谷の独自の思想的達成を論じる。

著者が劉宗周の修養論を明確に整理論述している点は評価できるが、「妄」の存在と「復性」の関係についてより立ち入った分析が必要であろう。著者は「妄」を概念装置としたり、劉宗周の修養論には随処に「仕掛け」があったとするが、劉宗周は単なる方便としてこれらの概念を重視しているとは思えないので、更なる考察が求められるのである。その他、方谷の時代は朱子学や陽明学がまた新たな活力を持った時期であるが、その中での方谷の位置についての見通しがあるとよかった。またこの時代は劉宗周に対する関心も強まったが、方谷には劉宗周に対する言及があまりないことの意味、方谷の太虚の説が中江藤樹以来の日本陽明学の特色である太虚重視とどう関係するのかなどについても検討がほしかった。

上記のような問題は残るが、明末清初の心学系修養論の理論を分析し、その論理構造を明確に描いてみせた点、またそれがどのような展開を見せたかの一端を明らかにした点は評価できる。更に経世家として知られる山田方谷の修養論を思想的に分析し、従来の研究を一歩進めたことも貴重である。

以上から、本論文を博士学位の授与にふさわしいものと判断する。

公開審査会開催日	2018 年　5月　22 日			
審査委員資格	所属機関名称･資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学･文学学術院･教授	土田　健次郎	中国近世思想･日本近世思想	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学･文学学術院･教授	森　　由利亜	中国近世宗教思想	
審査委員	早稲田大学･理工学術院･教授	永冨　青地	中国近世思想･陽明学	博士(早稲田大学)